

旬菜定食屋 おひつや

附属病院

臨床検査室

田中恵子



私は、長良川河畔の岐阜グランドホテルから東へ行った所にある「おひつや」を紹介します。

揖斐産ハツシモを使用した醜やか

でぶくらしたお

一品が楽しめる店

「おひつや」を紹介します。

ます。

地元紹介

秩父のお祭り

近藤 信夫

私の郷里の秩父地方(埼玉は、人口10万余の秩父市を中心に関東山系に囲まれた盆地です。曳き山に対する信仰心の厚い土地柄なのか、昔ながらの村落、集落ごとに行われる祭礼には多くの場合笠鉾と屋台を曳きまわす伝統が今も随所で受け継がれています。7月19日20日は秩父神社の川瀬祭りがあり、お祇園さまと称してこの日には子供たちが小ぶりの笠鉾と屋台を曳き回す慣わしです。長閑な夏の風物詩も、最近は少子化の影響のため各町内だけでは囃し手や曳き手が不足がちとなり近在から参加者を募るケースが増えています。一方、大人たちのお祭りは毎年12月3日の秩父神社例大祭で、地元では冬祭りと



あります。太太鼓1丁、小太鼓3~4丁、笛1本、摺り鉦1個で奏でられる音曲は、田舎の村祭り、京都の祇園祭りで奏でられる長閑な笛や太鼓のそれが似ても似つかない激しさを持っています。そのリズムは3連音を巧みに取り入れて細かい動きを示し、ちょうど遠くの海の潮鳴りを表しているようだと言われ、「さざ波ばやし」とも呼ばれます。内臓を震わせるようなそのリズムに秩父人の誰でもが子供のころから馴れ親しんで育ちます。このおはやしは、太閤秀吉が大阪城築城の石切、石曳きのために使つたものが起源とも、八丈島に流された関が原の敗将の宇喜多秀家配下が陣太鼓の打ち込みになぞらえ、うさばらしに打つたと伝えられる八丈島の太鼓ば

おり、祭りが庶民の娯楽としてばかりでなく、恐らく当時は今よりも重要な「外貨獲得」のための大興行であったことが偲ばれます。

秩父のお祭りの特色の一

つに「屋台ばやし」があります。太太鼓1丁、笛1本、摺り鉦1個で奏でられる音曲は、田舎の村祭り、京都の祇園祭りで奏でられる長閑な笛や太鼓のそれが似ても似つかない激しさを持っています。そのリズムは3連音を巧みに取り入れて細かい動きを示し、ちょうど遠くの海の潮鳴りを表しているようだと言われ、「さざ波ばやし」とも呼ばれます。内臓を震わせるようなそのリズムに秩父人の誰でもが子供のころから馴れ親しんで育ちます。このおはやしは、太閤秀吉が大阪城築城の石切、石曳きのために使つたものが起源とも、八丈島に流された関が原の敗将の宇喜多秀家配下が陣太鼓の打ち込みになぞらえ、うさばらしに打つたと伝えられる八丈島の太鼓ば

呼ばれています。この神事は京都の祇園祭、飛騨高山祭と並ぶ日本3大曳山祭りに数えられており、国指定の重要文化財に指定された4基の屋台と2基の笠鉾(今は市中の電線が巡行の妨げとなってしまって、鉾は外されている)が、勇壮な屋台囃子を背景に市中を巡行します。当日は近在からは無論のこと、この神事を見ようと多いときには30万人もの観光客が訪れる街は身動きが出来ないほど盛況となります。

秩父神社の起源は非常に古く、律令制の武藏国造(ぐにのみやっこ)が置かれた当時よりさらに200余年を越る7世紀以前と呼ばれる系統とは全く異質のもので、民俗学的にも大変興味深いおはや

りしに由来するとも言われております。これは川越など関東一円に普及している、江戸祭礼ばやしと呼ばれる系統とは全く

しであることが専門家の間でも指摘されています。とりわけ祭り好きの方には、まずは一見(一聞か?)していただき価値があるのではないかと思います。

(園芸部 口腔生化学分野 教授)

あなたの趣味 寄席

附属病院 看護部
大坪 妙子



年に3回程、東京旅行を計画し必ず立ち寄る場所があります。それは、寄席の観劇です。寄席とは、落語・講談・浪曲・漫才・手品などの芸能を観客に見せるための興行小屋であり、東京には主に四席の演芸場があります。寄席の中での落語は、衣装や道具、音曲を極力使わず、身振りと語りのみで物語を進めてゆく独自の芸能であり、高度な技巧を要する伝統芸能です。現在では人情噺・芝居噺を含めた演目(ネタ)が公演されます。落語において用いられる表現として、言葉・仕草で表現し、小道具として、扇子・手ぬぐいが用いられ、よく話をすすめてゆく。私は短い時間の空間で笑いを楽しんでいます。

寄席の終演、時打つ太鼓が切符売り場の上で前座さんがたくなにハネ太鼓は、お客様がお帰りになる様子を太鼓で打ちます。デテケ・デテケ(出てけ、出てけ)と打ち、太鼓の音を聴きながら木戸を出でます。このバチさばきは大変難しく太鼓修行の難関だそうですが、なんともユニークです。機会がありましたら観劇を楽しんでみて下さい。



